

〈論文〉

芥川の中国体験
—「支那遊記」を中心に—

呉 佳 佳

始めに

芥川龍之介は小さい頃から中国古典文学を愛読していた。その中国古典から培ってきた文化的な素養により、彼は悠久な歴史を持っている中国大陸の風景に憧れていた。大正十(1921)年三月、芥川龍之介は「大阪毎日新聞」の海外視察員として三ヶ月中国に派遣された。芥川にとって、この三ヶ月の中国旅行は、憧れていた中国風景探しの旅とも言える。しかし、現実の中国は芥川の少年時代から培った中国認識は同じであろうか？芥川は自分の想像した中国風景に出会えたのか？文人芥川の目に映った中国はどのような現状であったのか？また文人芥川が異文化としての近代中国を探究する時、どのような「文人的反応」が表れたのか？本論では芥川の中国旅行記『支那遊記』¹⁾を中心に、彼が中国という異文化を体験するときにあらわれた「中国認識」及び「文人的感受性」をめぐって、検討してみたい。

一、 少年時代から培ってきた中国認識

芥川龍之介は明治二十五年(1892年)東京の中央区(当時の京橋区)に生まれ、生後一年足らずで芥川家にひきとられて大切に育てられたのである²⁾。芥川はのちに芥川家を「文学好きの家庭」と呼んでいるように、この家庭の雰囲気の影響で、芥川は早くからも書物に親しみ、旺盛な読書欲を示した。さらに芥川自身の読書暦を記した文章³⁾によると、彼の読んでいた本の中で『西遊記』『水滸伝』は第一の愛読書である。芥川は幼少年時代から中国の文学作品を読み始め、中国認識の基礎となった。

芥川龍之介は大正十年に大阪毎日新聞の海外特派員として中国へ派遣された。中国文学作品を読んで想像した中国風景を実際に見ることができて、この旅は芥川が待ち望んでい

る旅とも言えるだろう。

芥川の憧れている中国風景はどんな風景だろう。芥川が少年時代から培ってきた中国認識はどんな認識であろうか。芥川は中国旅行をした後、旅行記『支那遊記』に、このように書いてある。

その中に汽車は嘉興を過ぎた。ふと窓の外を覗いて見ると、水に臨んだ家家の間に、高高と反つた石橋がある。水には兩岸の白壁も、はつきり映つてゐるらしい。その上南畫に出て来る船も、二三艘水際に繋いである。私は芽を吹いた柳の向うに、こんな景色を眺めた時、急に支那らしい心持になつた。

「君、橋がある。」

私は大威張りにかう云つた。⁴⁾

以上の場面は芥川が汽車で上海から杭州に行く途中、嘉興を過ぎた時のものである。芥川の描写には「こんな景色を眺めた時、急に支那らしい心持になつた。」という話がある。「こんな景色」は芥川が昔読んだ中国文学作品や見た「南畫」によく描いてある中国南方の風景であろう。芥川が自分の想像した中国像とぴったり合った風景を眺めた時、「急に支那らしい心持」になって、「大威張りに言う」ようになる。芥川の少年時代から培った中国認識は彼の中国旅行に深く影響を与えたのである。芥川の中国にいる三ヶ月余りの間に見かけた風景を、「中国らしい風景」と「中国らしくない風景」と分けて描いていた。

芥川が少年時代から培っていた中国認識及び憧れていた中国風景は次のようなものがある。

其處へ靜に門の外から、雨に濡れた轎子が二つ、四人の駕籠舁きに昇かれて來た。それが玄關へ横附けになると、まつさきに轎をくぐり出たのは、品の好い支那服の老人である。

その次に玄關へ下りたのは青磁色の緞子の衣裳に、耳環の水晶のきらめいてゐるのは、確に風流な心もちがした。

この光景を眺めてゐる内に、谷崎潤一郎氏のやうに、ロマンティックになり了わせる事もどうやら出來さうな氣がしたのである。⁵⁾

以上の文は芥川が中国の杭州のホテルに泊まったある夜の光景であつた。芥川が杭州に行くのは大正十年の五月のことであつた。芥川龍之介が中国に行く前に、谷崎潤一郎の中

国について書いた「秦淮の夜」を読んで、その舞台を借りて「南京の基督」も書いた。これは芥川が中国へ出発する一年前の大正九年7月のことであった。一年後の杭州で芥川が目映った光景で谷崎のことさえ思い出したように、芥川は谷崎の中国描写を愛読し、印象が深かったことが分かる。芥川は谷崎の文章に書いてある「ロマンチック」な雰囲気心が魅かれたのであろう。芥川の目のあたりにしていた「二つの雨に濡れた轎子」、「四人の駕籠昇き」、「轎をくぐり出た品の好い支那服の老人」、また「風流な心もちがした少女」などの光景はあつという間に芥川を導いて中国的な風景に入ってしまった。それらの人たちの一挙手一投足に込められた中国伝統的な文化の味わいが彼の思いにある中国像とびつたり合って、この「中国らしい光景」に身を置く芥川は谷崎の文章に書いてあるあのロマンチックな気持ちを実感させた。

芥川龍之介は自分の少年時代から培っていた中国認識をもとに、目の前の中国風景をはかり、中国という独特な環境を堪能していた。芥川は揚州を遊覧する時の光景について、このように描写していた。

城壁が盡きると同時に、水路の分れる處へ來ると、彼等の畫舫は右へ曲るし、我等の畫舫は反對の方へ、冷淡にも船首を向けてしまふ。見送れば彼等の舟の跡には、兩岸の蘆の靜な間に、薄白い水光が残つてゐる。「二十四橋明月夜。玉人何處教吹簫」——私は突然杜牧の詩が、必しも誇張ぢやない事を感じた。どうも揚州の風物の中には、私さへ詩人と化せしめるやうな、快い惱しさがあるやうである。⁶⁾

畫舫に乗っていた「揚州の美人に、一瞥を與へようと思つてゐた」が、結局あの畫舫は反対の方へ向けてしまつて、その畫舫の「跡には、兩岸の「あし」の靜な間に、薄白い水光が残つてゐる」しかなかった。このようなことを芥川の目のあたりに映つたその一瞬に、芥川は杜牧の詩を思い出し、杜牧の気持ちに共感を生み出した。

文の中に書いてある「二十四橋明月夜。玉人何處教吹簫」⁷⁾の詩句は唐代の詩人杜牧(803～853)の七言絶句「寄揚州韓綽判官」の詩句である。「揚州の二十四橋に明月が映えている夜に、あなたは又どこで歌姫に笛を教えているのでしょうか」というような意味である。

以上のような「書物」から得られた中国像は、しかし芥川は多く見つけられなかった。芥川の憧れていた中国旅行は彼にとって、むしろ少年時代から培っていた中国認識を打ち砕く旅とも言える。鷺只雄は「人は実際にその地に歩を印すことによってはじめて幻影や虚像から解放され、実像へ向けての着実な一步を踏み出すものとすれば、芥川にとっての中国旅行もまた幼時から培った憧憬としての中国、幻影としての中国を葬るには充分だっ

たといってよいであろう。」⁸⁾と書いてある。芥川が小さいころから知っていて、憧れていた西施の彈琴臺と館娃宮を、目の当たりにした時、彼はこのように書いている。

やつと靈巖山へ辿り着いて見たら、苦勞して來たのが莫迦莫迦しい程、佻しい禿げ山に過ぎなかつた。第一西施の彈琴臺とか、名高い館娃宮趾とか云ふのは、裸の岩が散在した、草も礫にない山頂である。

これでは如何に詩人がつても、到底わが李太白のやうに、「宮女如花滿春殿」なぞと、懷古の情には沈めさうもない。⁹⁾

この文章に書いてある「靈巖山」¹⁰⁾は江蘇省蘇州市の西南に位置してあり、歴史中の西施と関わる名勝旧跡である。李白の「宮女如花滿春殿」¹¹⁾という詩句は七絶「越中覽古」の転句である。「宮女 花のごとく 春殿に滿つる」と言う。後宮の女たちは花の如く春のような宮殿に滿ち溢れている風景である。

芥川が靈巖山へ遊覽に行くことを決めたのは、彼が自分の言ったように¹²⁾、幼少の時に呉越軍談を愛讀し、ずっと西施と范蠡のことが好きであり、蘇州にいた機会を借りて、自分の鼯鼠役者の古蹟を是非、見に行きたかったからである。しかし、わざわざ見に行つたが、目の前の古蹟の様子は「裸の岩が散在した、草も礫にない山頂」、「七級の廢塔」のような荒廢した光景しかなかった。これに対して、芥川の気持ちは「到底わが李太白のやうに、「宮女如花滿春殿」なぞと、懷古の情には沈めさうもない」ということであつた。書物に書いてある自分の憧れている風景を見たい希望を持っていたからこそ、目の前のこのような景色に出會つたとき、芥川は甚だ失望させられたであろう。

それから実際にすぐ後の文章には、芥川が靈巖山の山頂に建てられた靈巖寺の一室に滞在したとき、「私は埃臭い茶を飲みながら、妙に悲しい心もちがして來た」という文も書いてある。芥川のこの「妙に悲しい心もちがして來た」の「妙」は、一方で、苦勞を掛けたことに何の値打ちもないことで自分を哀れんできた；もう一方では、自分の鼯鼠人物の遺跡の荒れた光景、自分の潰れそうな中国認識、中国の伝統的な文化の没落した現状にも対して、心が痛んでいたのであろう。

今回の古蹟を遊覽した経験は芥川に齎した影響は深かつた。後の揚州を遊覽していた時、芥川が「私はこの泥の中を歩きながら、又古蹟なるものを見るのだと思ふと、甚心細い氣もちがした。」のようは話さえも出た。

芥川はこのような衝撃を受けながら、少年時代から培ってきた中国認識が少しずつ打ち砕かれた。想像の世界から踏み出した芥川龍之介は現実の中国を直面し始めた。

二、 文人的感受性

芥川は文人である。彼が異文化に出て行く時、普通の観光客ではなく、文人的な立場で観察することが多かった。現実の中国を直面し始めた芥川は文人の鋭い眼差し、豊かな感受性で、新しい中国認識を構築しはじめた。想像上の中国と現実の中国との間のギャップが生じた原因について、芥川は中国の内憂外患に注目しはじめた。

芥川が南京の孔子廟に行ったときの光景を次のように書いている。

門外に驢馬を乗り捨てた後、路も覺束ない草の中を行けば、暗い柏や杉の間に、南京藻の浮んだ池がある。と思ふと池の縁には、赤い筋の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押し分けながら、叉手網に魚を掬つてゐる。

此處は宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直に支那の荒廢ではないか？

私は一體「なげば」好いのか、それとも又喜べば好いのか？——さう云ふ矛盾を感じながら、こけむした石橋を渡つた時、私の口には何時の間にか、こんな句が「かすか」に謳はれてゐた。「休言竟是人家國。我亦書生好感時。」

但しこの句の作者は私ぢやない。北京にある今關天彭氏である。¹³⁾

孔子廟はまた「夫子廟」とも呼ばれている。南京市内の秦淮河北岸の貢院街に位置し、昔から孔子を祭っている場所で、また中国古代最大の科挙試験場——江南貢院の所在地である。歴史的に立派な孔子廟は芥川の目の当たりに映った光景は暗い「柏」と「杉」、南京藻の浮んだ池、そして茂っている「蘆」と「蒲」、魚を掬っている兵卒であった。芥川は文人の感受性で「それを思へばこの荒廢は、直に支那の荒廢ではないか？」と、この孔子廟の光景を通して、中国の直面している問題に「休言竟是人家國。我亦書生好感時。」の句を歌ったのである。

この句は「今關天彭」氏からの引用でした。彼は中国研究家で、漢詩人である。芥川が中国に旅行した時に、今關氏がちょうど北京に滞在していた。芥川はこの句を借りて「なんといつてもここは他人（つまり中国人）の国で、荒廢しても気にしないで」のような話と言うな、私も文人であるので、このような光景にはいろいろ考えさせられるものがある、と言うような気持ちを表したのであろう。

芥川が杭州に到着した時、西湖には強く興味を持っていた¹⁴⁾。しかし、翌日実際に西湖を遊覧した時、芥川は西湖に失望した。その原因について、芥川はこのような文を書い

ていた。

その支那美人は、湖岸至る所に建てられた、赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建の爲に、垂死の病根を與へられた。

いや、獨り西湖ばかりぢやない。この二色の煉瓦建は殆大きい南京蟲のやうに、古蹟と云はず名勝と云はず江南一帯に蔓つた結果、悉風景を破壊してゐる。

私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の爲に不平だつたばかりか、女史の靈の爲にも不平だつた。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女俠の墓門にしては、如何にも氣の毒に思はれたのである。

しかもかう西湖の俗化は、益盛になる傾向もないではない。どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが酔拂つてゐて、その又西洋館の前に、一人づつヤンキイが立小便してゐる、——と云ふやうな事にもなりさうである。¹⁵⁾

「赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建」はその時代の西洋文化の具体的な代表であった。この文を通して、芥川は中国的な風景を破壊して、低俗化した西洋のもの、また西洋人にひどく憎悪の気持ちを持っていたことを示していた。それと同時に、芥川は中国人自分が自国文化を疎かにして、西洋のものを追求することにも嘆かわしく感じていた。

ここの「秋風秋雨愁殺人」¹⁶⁾(秋風秋雨 人を愁殺する)は女性革命家の秋瑾が1907年7月15日に紹興で処刑に臨んで辞世の前に詠んだ詩句であった。その後、多くの人に伝えられていた。芥川はここで、「革命に殉じた、その後の中国革命運動の精神的支柱の一つとなった女性革命家秋瑾の身分と彼女の西洋文化の具体的な代表である煉瓦の墓門と繋がって見ると、「如何にも氣の毒に思はれた」と言った。

芥川は「ヤンキイ趣味に染んでいる中国風景」に対して、憎悪の念を持つには以下の二つの原因があるであろう。

一つ目は、芥川は文人であることだと思う。まず、文人芥川は秋瑾はどんな人かよく知っている。芥川は孔子廟で自分の感嘆して歌つた「休言竟是人家國。我亦書生好感時」のように、文人として世を憂え、他国や自国に関わらず、当時の中国の内憂外患の現状を鋭く感じていた。

二つ目の原因は、芥川が中国原風景に愛情を持っていた。前に言ったように、芥川は中国に行く前、日本に居た二十何年の間に大量な中国古典文学を読んだ。中国に行く前には、それらの書物に描いた風景に幻想を抱いて、「見に行きたい」という気持ちを長い間持つ

ていた。しかし、中国にいる間に、芥川は自分の憧れている中国らしい風景にはなかなか出会えなかった。かえって場違いのような西洋化された風景があちこちよく見かけた。これはすごく芥川の反発を買ったと思う。それが故に芥川は辛口で「どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが酔拂つてゐて、その又西洋館の前に、一人づつヤンキイが立小便してゐる、——と云ふやうな事にもなりさうである。」と言うように皮肉した。

このような内憂外患の中国は芥川に極度の失望を引き起こした。芥川が中国の一ヶ月半の経歴に基づいて、蕪湖滞在の時、そこにいた友人である西村さんに対して中国の現状についてこのように批評した。

その夜唐家花園のバルコんに、西村と籐椅子を並べてゐた時、私は莫迦莫迦しい程熱心に現代の支那の悪口を云つた。現代の支那に何があるか？政治、學問、經濟、藝術、悉墮落してゐるではないか？殊に藝術となつた日には、嘉慶道光の間以來、一つでも自慢になる作品があるか？しかも國民は老若を問はず、太平樂ばかり唱へてゐる。成程若い國民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の聲と雖も、全國國民の胸に響くべき、大いなる情熱のないのは事實である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この國民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリスタか、淺薄なる支那趣味の愴怳者であらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌惡に堪へない筈である。……………¹⁷⁾

「現代の支那に何があるか？政治、學問、經濟、藝術、悉墮落してゐるではないか？」——中国に対する愛情を持っていて、中国に行った芥川がこのような「悪口」を言ったのは上海、杭州、蘇州、揚州、鎮江、南京などの所を遍歴、長江を遡り、漢口、廬山、長沙に行く途中であった。蕪湖に行くのは、芥川が中学時代の同級生の西村貞吉の招きに応じたのである。西村さんは当時ちょうど蕪湖に滞在していた。一ヶ月半の中国旅行を経て、現実の中国が芥川に齎した衝撃は彼の中国認識に極めて大きな変化をさせた。そして旧友の西村と再会したときに、初めて遠慮なく本音を漏らした。

芥川が目に入った中国のようすは混乱する社会、没落する文化、「老若を問はず、太平樂ばかり唱へてゐる」國民の風景ばかりであった。「私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この國民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリスタか、淺薄なる支那趣味の愴怳者であらう」のような本音を吐いた。

更に「いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌悪に堪へない筈である。」と批判した。

芥川のこの「悪口」は非常に鋭くて、人に目を覚まされると思っている。少年時代から中国を憧れていて、現実の中国に幻想を抱いたからこそ、中国の現状を直面したときに、まったく失望させられた。また、心から中国に関心を持っている人しか、このような「悪口」を「ひどく熱心」に言わなかったと思う。もともと一人の外国人として、「一介の旅客」として、讀賣新聞の上海特派員の池田桃川¹⁸⁾のように、まったくあちこちの風景に焦点を当てる「海外特派員」になればいいのに、芥川は中国の「政治、學問、經濟、藝術、」さらに「國民的腐敗」にも注目したうえ、深く不満を感じた。これはまさに文人芥川が中国に対する「愛」の表現であろう。

まさに芥川の言ったように「この國民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、顔唐を極めたセンジュアリストか、淺薄なる支那趣味の憐愍者であらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌悪に堪へない筈である。」当時の中国に対して、「私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。」と言い出せる人には、外国人どころか、中国人さえも少なかったであろう。「太平樂ばかり唱へてゐる」や「中国をおだてる」人が多かった。そのような人間には「何か魂胆がある」でなければ、「心さへ昏んでいる」もののように見える。本当に中国を愛する人間は、中国に存在している問題を黙って見過ごすことはしない。芥川は文人の感受性をもって、当時の中国の現状をしっかりとつかんだ。そのうえで鋭い言葉で当時の時勢を批判した。芥川のこの「熱心」な批判は彼が中国に対する「愛情」から、または文人の良心から生じたと思う。魯迅も芥川のこの「悪口」に高い評価を与えた。魯迅は芥川の『支那游記』はいい文章だと考え、更に「芥川龍之介は誠実な友達だ」と褒めた¹⁹⁾。

終わり

芥川龍之介は小さい頃から中国古典文学を愛読して、その中国古典から培ってきた文化的な素養により、彼は悠久な歴史を持っている中国大陸の風景に憧れていた。芥川にとって、三ヶ月の中国旅行は、自分の憧れていた中国風景探しの旅とも言える。しかし芥川の憧れていたこの三ヶ月の中国旅行は彼にとって、少年時代から培った憧憬としての中国、少年時代から長い間に培っていた中国認識を打ち砕く旅とも言える。芥川は少年時代から培った中国認識を持って現実の中国へ向けての着実な一步を踏み出して、自分の憧れていた中国古典的な風景、或いは中国伝統的な風景を探し始めたが、芥川の目に映った現実の

中国は内憂外患な中国であった。西洋化に影響され、変わりつつあるものであった。芥川は自分の憧れていた中国風景になかなか出会えなかった。却って中国传统文化の没落な光景や場違いのような西洋化された風景がよく見かけていた。このことはすごく芥川の反発を買った。このような現状に直面していた時、文人芥川は自分の鋭い洞察力と豊かな感受性を持って、1920年代の中国像をしっかりとつかもうとしていた。芥川は改めて彼の新しい中国認識を構築し、アジアの一員として、欧米列強の圧力下の中国の運命を如何に改善しようか、と悩んでいたに違いない。

注：

- 1) 『支那遊記』 芥川龍之介 改造社版 昭和52年7月1日発行
- 2) 以下の年表参照：鷺只雄編著 『年表作家読本 芥川龍之介』 河出書房新社 一九九二年
- 3) 「愛読書の印象」——「芥川龍之介全集 第六巻」岩波書店 1996（平成8）年4月8日発行
子供の時の愛読書は「西遊記」が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの「天路歷程」なども到底この「西遊記」の敵ではない。それから「水滸伝」も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。一時は「水滸伝」の中の一百八人の豪傑の名前を悉く諳記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒険小説や何かよりもこの「水滸伝」だの「西遊記」だのといふ方が遙かに僕に面白かつた。
- 4) 『支那遊記』 九十四頁
- 5) 『支那遊記』 一百四十六頁
- 6) 『支那遊記』 一百八十七頁
- 7) 二十四橋明月夜。玉人何處教吹簫
寄揚州韓綽判官
杜牧
青山隱隱水迢迢，
秋盡江南草木凋。
二十四橋明月夜，
玉人何處教吹簫。
- 8) 鷺只雄編著 『年表作家読本 芥川龍之介』 河出書房新社 一九九二年 百二十頁
- 9) 『支那遊記』 一百六十頁
- 10) 靈巖山：天平山の南西（約4kmのところ）にあります。江蘇省蘇州市の西南に位置してあります。歴史中の西施と関わる名勝旧跡です。
- 11) 宮女如花滿春殿
越中覽古
李白
越王勾踐破吳歸
義士還家盡錦衣
宮女如花滿春殿
只今惟有鷓鴣飛
- 12) 『支那遊記』 一百五十六頁
- 13) 『支那遊記』 一百四十七頁
- 14) 『支那遊記』 一百一十一頁
すると、見る見る我々の目の前へ、薄明るい水面が現れて來た。西湖！ 私は實際この瞬間、如何にも西湖らしい心もちになつた。茫茫と煙つた水の上には、雲の裂けた中空から、幅の狭い月光が流れてゐる。その水を斜に横ぎつたのは、蘇堤か白堤に違ひない。堤の一箇所には三角形に、例の眼鏡橋が盛り上つてゐる。この美しい銀と黒とは、到底日本では見る事が出来ない。私は車の揺れる上に、思はず體をまつ直にした儘、何時までも西湖に見入つてゐた。
- 15) 『支那遊記』 一百十四頁
- 16) 秋瑾(1875年11月8日－1907年7月15日)は、清朝末期の女性革命家。詩人。原名、閨瑾。紹興の人物。秋瑾とは、「秋の美しい玉」の意味である。女性革命家であつた秋瑾の処刑は、清当局が想像もしな

いほど大きな反響を呼び、その後の中国革命運動の精神的支柱の一つとなった。

「鑑湖秋女俠」は秋瑾の号である。「鑑湖」は紹興（秋瑾の原籍地）の南西にある湖の名である。

17) 『支那游記』 二百十八頁

18) 池田桃川：讀賣新聞の上海特派員である。『江南の名勝史蹟』の著者である。『江南の名勝史蹟』は上海の日本堂書店が大正十年三月下旬に発行した作品である。芥川は中国に滞在したときにこの本を読んだことがある。

『支那游記』 一百十頁：

これは池田桃川氏の「江南の名勝史蹟」に出ているのだから、格別自慢にも何にもならない。

19) 『鲁迅和日本文学 1』——『鲁迅研究论文集 1』浙江文艺出版社，1983.

鲁迅也对《中国游记》有过这样的评价。据作家孙席珍回忆：“鲁迅曾对人称道它（注：《中国游记》）确是好文章，并力言我们中国人过去是夜郎自大，后来是自欺欺人，只爱听别人言不由衷的夸赞，最不喜欢人家指责我们的毛病，犹如阿 Q 之讳言头上的癞疮疤，正需要芥川这样诚实的好朋友来刺我们几下，头脑也许才会清醒。”